

ろんどんアフター

うんえあふあーれん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fate／staynight UBWの倫敦エピソード後のお話です。

目次

ろんどんアフター

「とおさかー。とおさかー」

リビングから士郎の声が聞こえる。

私は「なあに？」と声を出そうとして——止めた。

何も無かったかのように、読みかけの雑誌に視線を戻した。

「とおさかー？ 入るぞー」

ガチャリ、と寝室のドアが開く。

「とおさかー……いるなら返事してくれよ」

士郎は不満げに息を吐く。

「士郎……貴方」

一切の喜怒哀楽を表情から消し、淡々と私は呟く。

「この部屋に遠坂姓は2人いるんだから、ちゃんと判る様に呼んでよ

ね？ ね——遠坂士郎くん」

「う……」

目に見えて士郎が狼狽する。

対して、私は我ながら意地の悪るような笑みを浮かべる。

「凜——」

「なあに、士郎」

「晩飯、できたぞ」

士郎は顔を真っ赤にしながら、ぶっきらぼうにそれだけ告げて、パタパタとリビングへと戻っていった。

2人での夕食。

今までも同棲してた訳だし、何が変わったという事もない。けど。

私の心に広がるコレは何なのか、まだ良く判っていない。

良く判らないモノを心地よく楽しんでいる、と言った方が正確かもしれない。

「凜——本当に良かったのか？」

士郎が聞いてきた。

私は一度箸を置き、丁寧に答える。

「ええ。私も士郎も天涯孤独の身——まあ私には桜が、士郎に藤村先生がいるけど——そんなに大々的に式を挙げる事もないかなーって。時計塔の連中は基本的にライバルだし、将来的には敵だしね——」

私はそこまで言ってから、箸を持ち、

「けど——今日はいつもより献立が豪華ね。士郎のそういう所、好きよっ。」

いつもより3段階は豪華な夕食をツンツンしつつ、ウインクしながらそう言った。

士郎は顔を赤くして黙ってしまう。

「けど、お世話になってる人には、挨拶はしなくちゃね……明日、一緒に行きましようっ。」

「ああ……そうだな」

士郎は、ふ、っと息を吐き、普段の表情に戻る。

「シエロー!? 何てことでしよう!! ああこの女狐に何を誑かされたのですか? 私でよければ除霊して差し上げますわシエロー!」

「ルヴィアさん……いえ、誑かされただなんて……なあ、凜?」

俺は思わず頬を掻きながら、凜に助け舟を求めた。

しかし、

「凜ですって!? シエロー! どうしてこんな女を親しげに呼ぶのです!? うろうう」

完全に激昂してて、聞く耳を持ってくれない。
すると、

凜が俺の左腕を掴み、ルヴィアさんの眼前に突き出す。

俺達の薬指には、当然ながら——

「——ッ!!」

ソレを見たルヴィアさんは、フラフラと倒れ込んでしまった。

「じゃ、そーゆー事だから、大家様。なるべく、夜は静かにするようにするけど、騒がしかったら御免あそばせ」

凜はそれだけを一方的に告げて、俺の腕を引っ張りルヴィアさんの応接間から出ていった。

「ほう……結婚か」

「ええ、そうよ。悪い？」

凜は嫌そうに眼前の師に向かって悪態を吐く。

「いや……好きにするといい。それで——まだ暫くは時計塔^コで修行を続けるのだろうか？」

「そのつもりよ。それから先は士郎と決めるわ」

ニコニコ顔の凜と、いつも通り不機嫌そうなロード。

ロードが俺の方を見る。

「……君は……」

「俺ですか？ えみ……遠坂士郎です」

「ミスター・トオサカ——君とは以前、話した事があったな」

「ええ。推薦を断った日の事ですね」

たしか1年程前だ。

俺はともかく、時計塔で最優と呼ばれているロードが俺との会話を憶えていた事に少しばかり驚いた。

「ミスター・トオサカ。あの時口にした言葉は——」

それは。

あの時、思わず口にした、呪われた理想、救われない希望の事。

「ええ。俺にはもう届かない理想なのかもしれないかもしれませんが——けど、それに負けない程大切なヒトを得たんです。それは——」

俺の新たな希望なのだ。

「構わんよ」

訥々と何とか自分の言葉を紡いでいたけど、一言で切って捨てられた。

「人とは、移ろいゆくものだ。必然的に人が抱く理想、希望、願望——

—それらも刻と共に移ろいゆく。故に——」

「人を、抱く理想の貴賤で評価する事は、意味を為さない」

「……………」

ロードが何を言いたいのか掴みかねていると、

「君が時計塔への在籍を望むなら、私の下へ来い」

俺に向かつてそう告げると、くるりと背を向けて歩き出した。

「え……?!」

俺は絶句する。

「ちよつとアンタ！ どーゆーつもりよ!？」

凜も意図が掴めないのか、自分の師をアンタ呼ばわりして問い質す。

「勘違いするな」

あくまで淡々とした口調。

「貴様の妻は時計塔に残るのだろうか？ 貴様が居ればミセス・トオサカも少しは大人しくなるだろう……日本では『猫の首に鈴とつける』と言うのだったか」

「失礼ね！ それと諺の意味、違うから」

「知っている。私なりのジョークだよ、ミセス・トオサカ。だが貴女が大人しくなるなら、安い買い物だ」

「ぐぬぬ……」

凜はそこまで貶される理由に覚えがあるのだろう、敵意剥き出しな唸り声を上げている。

「すみません、凜と少し相談してからで構いませんか？」

俺はそんな中途半端な答えを返す。

「土郎!？」

凜が声を上げる。

「構わんよ。その時は私の研究室に来たまえ」

そう言つて、時計塔屈指の講師は去っていった。

「で、どうするの？ 昼間の話」

自宅に戻つてきて、開口一番、私は最も気になっていた件を問う。

「うーん。そうだなあ……」

土郎はしばし逡巡した後。

「俺だけじゃなく、凜もあの人に借りを作っちゃう事になるけど……」

凜がまだ数年コツチ時計塔にいるつもりなら、良い話だと思うよ」

「そうじゃなくて！」

私は思わず声を荒げる。

「士郎がどうしたいかって聞いているの」

それは即答だった。

「凜の隣が、俺の席だから」

何の迷いもない、真剣な眼差し。

「……………ッ!!」

思わず声が止まる。

「正義の味方に——アイツを超えるどころか、背中にも追いつけないだろうけど——それでも——」

私はそう告げた士郎の顔を見て、冷水をぶっかけられた気がした。

「いい。もう判った」

けど。

うまく言葉が出てこない。

恐ろしくぶつきらぼうな言葉がやっと出ただけ。

けど、

士郎には私の気持ちは伝わったようだ。

「……………うん」

満面の笑みで頷く士郎。

「とりあえず夕食を作るわ。今日は私が腕を振るうから、士郎はゆっくりTVでも見てて——」

そう言ってキッチンに向かう私。

「ああ、ありがとう」

そうして。

俺達はいつもおりの夜を過ごし——

明日、新たな一步を踏み出す事にしたのだった。